

雨の日の楽しみ

さんのみや
三宮 麻由子

ある年の梅雨、私は通勤途中に信号が変わるのを待っていた。頭上の傘に大粒の雨が降り注いでいる。あんまりうるさく落ちてくるので、ふと、傘の天井のあたりに内側からのひらをあててみた。形からいうと、手で傘を支えたような格好である。そんなことをしたところで雨が食い止められるはずもない。ところがそのとき、私は何か、とても不思議な感触を覚えた。てのひらに大きな丸いものがひっきりなしに落ちてくる。まるで小人がてのひらの上で踊っているかのようだった。あるいは、妖精たちが宝石をばらまいていてもいったほうがいいかもしれない。

「雨粒だ。」

その一瞬前まで、重苦しい音の圧力となって私の頭にのしかかっていた雨が、突然、無邪気でかわいらしい粒々に姿を変えて、てのひらの上で楽しそうに飛び跳ねている。それはまさに、空が魔法の箱となって、恐ろしい雨をえもいわれぬ滴の精に変身させた瞬間だった。

そういえば、雨や雪の粒をじかに触ることはなかなかできない。もちろん、手を差し伸べれば雨そのものに触れることはできるけれど、それは雨粒ではない。雨自体は手に触れた瞬間、もう粒ではなくなってしまうからである。触っている私にとって、それはもはやただの水のかけら、

手をぬらす少量の水滴でしかない。

ところが傘ごしの雨は、なぜだか丸いまま触っている気がする。傘の外で真っ平らなてのひらに直接あたるのと違い、傾斜した傘にあたった雨粒は、すぐに碎けないのかもしれない。その粒が手の随所にポツポツとあたる感じは、まるでさまざま大きな丸い生き物が、空から私の傘に次々と遊びに降りてきているかのようだった。その感触をより正確にいうのなら、クッキーなどについている空気の入ったパッキングを潰すときのような、細かいが質量のある快感といった感じであろうか。

それから何年かして、私は傘ごしの雨を楽しめるのは、梅雨時に限られることに気づいた。例えば夏の夕立では勢いが強すぎて、傘に手をあてて遊んでいる余裕はない。また、風が吹いていると傘にまっすぐ雨粒が落ちてこないのも、雨の手ざわりを楽しむというわけにはいかない。春雨は細く静かで、ほとんど傘にあたる感触がないし、秋や冬の雨は風にあおられて、直接あたる確率は少ない。

ところでこうして雨を好きになり始めると、梅雨時のまっすぐな雨が、更にいろいろなことを語っていることに気づいたのだ。雨は私に、晴れや曇りの日には決してわからなかった街の様子を、細やかに伝えてくれていたのである。

あれは、住宅地に降り注ぐ雨のまった中にたたずんでいたときのことだった。私の耳に急にたくさんの音が飛び込んできた。トタンの屋根、雨ざらしの自転車、転がっている空き缶、車にかけたシート、大きな門、そんな街の景色に、雨があたっていたのである。どれも、いつも私がつぶつかるまで自分の存在を教えるはくれないものばかりだ。

梅雨の雨は、その無愛想なものたちの存在を優しく音に訳して、私の耳に伝えていたのであった。

17 「トタン」薄い鉄板に金属の亜鉛の膜をかぶせたもの。

トタン屋根にあたって短い余韻を残す平たい雨、門柱に落ちてカアンと小気味よく散る雨、路肩に転がった空き缶にみごとに命中してキーンと歌う雨……。足もとのアスファルトにも一面に雨滴が降り注ぎ、響きのない不思議な広さの音をたてていた。まるで地面が浮き上がっているかのようだ。更にあたりの空間に耳を傾ければ、さまざまな高さのものにあたる雨の音がいくつもの層となって聞こえ、空気の中に満ちている。

自分から音をたてないために、ふだんは私にとってほとんど無に等しい存在である街並み。それが、雨の日にだけ世界にたった一つしかない楽器に生まれ変わり、次々と音を紡ぎ出しては私の鼓膜にぼんやりと輪郭を表してくれる。その輪郭を物語る音が空中で混じり合うのを聞いていると、それまで想像もできなかった、雨の日だけの特別な景色を楽しむことができるのだった。

庭の雨は私の手の届かない葉っぱとジョイントコンサートをしているし、森の雨は木の密度を教えてくださいました。常緑樹にあたる雨は少し細い音で、ときには木漏れ日ならぬ木漏れ雨となって頭にビシヤリとやってくる。広葉樹の雨はまるで傘に落ちる滴のように、あちこちでポトポトとつぶやいている。滴は碎ける前に一度しっかり葉の上に落ち、植物をキツチリと潤すのだ。

なかでも、紅葉の季節の小雨は格別である。ハラハラと音にならない音をたてながら落ちてくる木の葉の音と、小雨の細かな雨滴が敷き落ち葉をぬらす音とは、どちらがどちらか迷ってしまう。繊細な雨粒たちは、命を全うしてカラリカラリと最後の音楽を奏している落ち葉のように、空での命を輝かせ終え、神秘の竖琴を奏しながら地上に舞い降りてくるようだった。

〈出典『そっと耳を澄ませば』（集英社、二〇〇七年）〉

【著者】三宮 麻由子（さんのみや まゆこ）

一九六六（昭和四一）年—
エッセイスト。東京都の生まれ。

【著書】『そっと耳を澄ませば』『四季を詠む』

365日の体感 など

1 【路肩】道路の端の部分。

11 【常緑樹】一年中、緑の葉をつけている樹木。

12 【広葉樹】薄くて平たい葉をつける樹木の総称。